Bull. Mukogawa Women's Univ. Humanities and Social Sci., **50**, 96–102(2002)
武庫川女子大紀要(人文・社会科学)

『捃玉集』と清堂観尊
―版木の発見をめぐって―

管　宗　次
(武庫川女子大学文学部日本語日本文学科)

一、はじめに

紀州九度山不動院の第七世住職であった教伝房観尊は詳細年月日は不明ながら、紀州国学の中心であった本居内遠のもとに、入門誓詞を送り、その門人録に載せられもする国学への思いの深い文雅僧であった。

『本居全集』(本居清造編、本居全集首巻、昭和三年三月二十日刊、吉川弘文館)所収の「本居内遠門人録」の内、「本居内遠門人録追加　天保十四年より弘化四年まで」(九七頁)に

同(紀伊)九度山　不動院内真教　観尊　清堂

とあがる観尊だが、観尊の一生の内に、国学兼学の真言宗僧侶らしい著書を著わし、その事業として、一石碑を建立した。永く、そのことは忘れられていたが、今度、その版本『捃玉集』一冊の全揃いの版木が発見されるに及び、従前は学会に知られていなかった観尊の家系や伝記もその詳細が明らかとなった。

観尊の生家は、九度山の豪商泉屋で、現在も続く九度山の名家萱野家である。観尊は文政三年生、明治十七年没、享年六十五才。泉屋三代目の萱野忠右衛門の実弟であった。真言宗の僧侶となって九度山不動院の住職となるが、豊山長谷寺にあったり、金光院資を勤めたりしている。また南紀清堂と号したり、教伝房観尊と名乗ったり、沙門直孝とも称している。

その和歌は、自ら編纂に従事した『たちばなの香』に二首、『庵のうめ集』に一首と、類題和歌集流行の頃としては、その数は少ないが、今般発見の版木によって私家版という自己負担の大きな事業によって、真言宗僧が国学で得た学識と、その研究方法を、自らの宗派遺跡の検証と顕彰に努めたことは、近世後期から幕末期の国学という学問の方向なり、浸透として興味深いものがある。

また一地方文雅僧が自らの研究活動を公にするために、建碑[1]と出版という事業を、おそらく実兄萱野忠右衛門(泉屋)の経済的支援によって成し得たことも推し量られるが、次にその出版書『捃玉集』を取りあげることとしたい。

二、校正本『捃玉集』

『捃玉集』は、現在、稀本に属する本で、筆者の知るところでは、数年前に筆者架蔵となった一本を知るのみであり、『国書総目録』にも未収、しかし『高野のしおり』(明治二十八年刊)や『高野山名所図録』(明治三十七年刊)などには『捃玉集』は引用されており、

九度山不動院観尊師、翁の志を継ぎてこの碑を建て、なほ、捃玉集を著してその説を述べたり、爾来再び毒説を含みし、詩歌を詠めるものなし

としている。やや遠回しな表現となったが、『捃玉集』の内容は次のようなものである。高野山奥之院に流れる玉川の水は毒水との説があって、それは『風雅和歌集』の

忘れても汲やしつらむたひゝとの
高野の奥の玉川のみつ

という和歌の詞書に「高野の奥院へ参る道に玉川と云河の水上に毒虫多かりければ此流のむまじき由」とあることで、以来、ここでは毒水のことを詠む例が少なくない、このことを観尊は憤り、また、その事に不審を感じていたところ、安房の国学者山口志道がはやくよりそのことを難じていたことに深く共鳴して、山口志道上京の折、乞いいれて説を受け、自らの説をも立てた。

それらのことを世の人々に広く知らしめんとしての建碑とそれに伴う出版物が、この『捃玉集』であった。当時、俳諧などでは句碑とそれにあわせた出版は多かったが、こうした学説流布のための出版と碑の建立は

珍しい方であろう。勿論、自らの名と和歌を記すことも忘れなかったが、宗教的聖地で、空海が聖地として選んだ所に毒水などあるはずもないというあたりと、諸書を播いてみたという考証に余念の無いところに、真言宗僧の観尊、国学の学問を得た観尊の思いと態度を垣間見ることができる。次に『捃玉集』をあげる。

捃玉集　」表紙

雨壷山樵輯

捃玉集

清堂蔵梓　」見返し

捃玉集

忘れても汲やしつらむ

たひゝとの高野の

奥の玉川のみつ

此高野玉川ノ歌風雅集ニ載ラルゝトイヘドモ前書ノ詞ニ高野の奥院へ参る道に玉川と云河の水上に毒虫の多かりければ此流のむまじき由をしめしおきてト云迄ハ後人ノ詞ナリシカシテよミ侍りけるトアルハ作者ノ詞ナリ実ニオボツカナキ前書ト云ベシ風雅集ヨリ前ニ此歌ノ沙汰ヲキカズ清輔朝臣ノ袋草紙ニハ希代ノ歌ノ部ヲ立テゝ神佛ノ　」一丁表

歌ヲハジメ貴人高僧ノ一フシアル歌ハ悉ク載ラレタレドソが中ニモミヘザルハ如何トゾ思ハル(ル)如此言ハゞ勅撰ヲ論ズルニ似レドモ数百年ヲ経ルトキハ国史ノ上ニモ誤リアリテ後世ヨリ是ヲ議論ス況ヤ俊恵法師難勅撰ノ書契沖ノ難勅撰ノ書等有ヲヤ此忘レテモノ歌ノ詞書ニ毒虫ノコトヲ記シ弘法大師トアレドコレ大ナル誤リニテ前書ノ詞ト歌ト意味甚別ナリ一本ノ風雅集ニハ高野山へ詣ける人をおくる読人しらずトアリ解曰此歌ノ読人ト高野へ参詣スル人ト朋友トミユ歌ヨミシ人ハモトヨリ高野山ノ様子ハ能シリ侍ル人と見ヘタリ後ニ登ル人ニ告テ高野へ登ラレタゾナラバ山ハ宇内無雙ノ霊山ニシテ山ノ形體ハ八葉ノ蓮花ノ如ク高峰八方ニ峙テ有レバ八葉峰ト云ル也其山ノ谷々ヨリ涌泉ノ清浄ナルヲ汲給ヘ是則真言秘奥ノ潅頂等ニ用ユル閼伽ナドノ餘流ナリ此浄流ヲバ玉川トハ云ナリナドモノガタリシ別レニ望ミテ読テ遣ハセシナラン一首ノ意ハ斯モノ語リシヌル言葉ヲ忘レテモマサシク山へ登リテ佛界浄地ノ清流ヲ見ラレタゾナレバ語リ聞セシ言葉ヲ忘レテモ汲ヤシツラン汲テ社アロウ高野ノ奥ノ玉川ノ水ト云意也総ジテ山内ノ涌泉諸寺院ノ筧泉ヲ清浄玉水ト云其筧泉ノ餘流皆隠所川トナル中ニモ奥院摩尼山下ニ涌出ハ殊ニ如玉泉　」一丁裏

ニシテ御廟橋下ヲ通リ姑射山ノスソヲ廻リ隠所川ニ落合テ流末大瀧トナル也此川ハ玉川ニソノ其源上ヲ尋ヌレバ摩尼山楊柳山轉軸山ノ三山ヲハジメ壇場并寺中ノ八方ニ連ル乾獄等ノ八葉峰間ノ谷々ヨリ涌ケル滴リ也然ルヲ何ノ頃ヨリ欤玉川ハ毒流ジヤ千手院谷奥ナル秘井テフモノハ玉川ノ源上ニシテ毒水ジヤノト云誤ル濛説笑止千萬ナリ元来千手院谷秘井ノアル地ハ奥院ト其間山谷ヲ隔テ、地脉大ニ異リ水気ノ通フ様ナシに其誤セレルモトヲ尋ヌレバ高野大師金剛峰寺開発ノ頃僧坊モ数ナクシテ谷々ヨリ涌出ル泉ノ落合其流レノ清ケレバ社玉川ト云ナルヲ三度廃絶シテ後今ノ繁栄ニ至レル其繁栄スルヨリシテ厠屎水等ノ不潔ヲ爰ニ流ス今隠所川ト呼称スルモノコレ也然レバ清水ノ濁水トナレルヨリ濁水毒水音近ケレバ終ニ毒水ト云誤リテ世流布ス然ヲ此歌ノ詞書ノ誤マレルヲ改ムル者無シテ宗碩ノ勅撰興雅僧正ノ安撰一無ノ通念集其外兼載雑談神明鏡名所方角鈔和漢三才図絵問覚高野風雅本草啓蒙大和本草茶談残編紀伊国名所図絵俳諧名所小鏡等ノ諸書ニハ皆毒水ナリトスコレシカシ風雅集忘レテモノ歌ノ誤マレル詞書ヲ本拠トスレバ所謂其本乱レテ末治マラザルノ理ニシテ信用スルニタラズ今度秘記并建長年中ノ御　」二丁表

神託貞観寺僧正ノ図記真然大徳ノ奏聞其外難波契沖阿闍梨上田秋成ノ胆大小心録等ノ毒水ニハアラズト云諸精説ニ本ヅキテ房洲山口志道翁は長歌ヲ詠シ碑ヲ奥院ニ建立ス其碑図ヲ写シテ以テ遠友ニ贈ル因ミニ諸人ノ玉川ノ歌ヲ捃ヒテ記シ侍リヌ

碑面

長歌并反歌　安房国　七十六歳　山口志道

玉　雲霧のはれにし時ゆ高野山蓮の嶺の白露のした

川　たりつたふ玉川の其ふる歌を何の頃誰衣手の濡そ

碑　めて無名なかるゝ世と成ぬそこし思はし高知や天

の御蔭天知や日の御蔭齢の末に旅人も幾代か汲
ぬその水を汲て我しる白真弓今より後はわすれ
ても無名録すな此玉川に
反
もろ共に汲て社しれ高野山蓮の峰の歌の玉水
天保十一庚子歲八月十五日
前権大納言藤原公説篆額　□　□　」二丁裏

杉庵志道ぬしは山水をこ
のみて諸国の名所を遊歴
せりしかるに紀のくにたか
野の奥なる玉川毒水てふ
ことも今はけにあらさるよし
みつから手にむすひ汲　」三丁表
しりてけり其言をきゝて
よみて遣しける
正三信公尹
君か世は高野の奥の水迄も
とく澄てこそなかるへらなれ　」三丁裏

碑陰
志道翁姓山口小字利右衛門号杉庵房州人也幼稚有奇才志学通経史及国書
就中留意於古事紀(ママ)神代巻数歲終得布斗麻邇之霊妙明皇国萬古古言假字之
深理ト布斗麻邇知人世不伝之神語釈見聞不解之疑満著水穂伝等諸書教後
人不廃誠一世之俊傑也老遊于皇都天保□皇都賜禁階紅梅及美与
也古礼添歌於道応千歲人軸巻田子浦人之別称也是翁之寵光也先与予輩偕
遊于此山深玉川泉源試掬此泉衆人更無害也翁頻歎訛伝此川古歌懇詠長歌
指南焉予云於八葉峰中不汲法流者是何水乎吁々逝者区止天保壬寅七月十
一日不果志読辞世倭歌寂然長逝畢予也尋此志欲建碑於此地居諸易移已向
七歲也依諾謀門弟子志廣等同志者聊為佛果菩提鐫石備満歲不朽畢
蓮の峰露の玉川水上は世にありかたき苔のほらかな
維嘉永元丙申仲夏念八日　清堂観尊誌
高野山分のほりつる諸人のむすふも清き玉川の水

皇都　上野志廣　」四丁表

（四丁裏～五丁表）
（見開きで玉川の絵）
浄水潔於玉
堪洗心胸濁
祖師恩恵深
長教行人掬
報秋
玉川の清き
流れに影
みれは
塵のけかれも
なき我身
かな
応喜　」四丁裏

高野山玉川之図
武田敬写（孝峯）　」五丁表

漫吟集　雑下
玉川や名にも其水汲へくは
たか野の奥の法こそ有けれ
此歌ハ契冲阿闍梨ノ詠スル処ナリ玉川ヲハ弘法大師ノ寿シ玉ヒシ御
詠歌サヘアルヲ世ニ毒水テフ名ヲ負セシトノ歎息ノ言葉ナリ此アザ
リハ野山ニテ密教ノ渊源深ク極メ潅頂ヲモ執行セシ碩学ノ僧トゾ
萩薗家集
榕つむたか衣手のしつくより
なかれそめけむ玉川の水
参議具集
高野山清き流れを旅ひとも
くまて過にし世こそおし(ママ)けれ　」五丁裏

三

哲長朝臣
たか野山奥をなかる、玉川の
水も汲へきためしをそ聞
已下数十首近刻

」六丁表

」六丁裏（裏表紙）

次に書誌をあげる。（矢盛教愛旧蔵、現在は管蔵本）

○書名　「捃玉集」（版木には、一枚版木に袋の版木があって、袋には「玉川の水」とあり）

○体裁　現在は大和綴、糸穴を存するのでもとは四針眼訂の和綴かと思われる。

○丁数　共表紙の全七丁、（本文六丁）、（見開き一丁分は朱・藍などの彩色刷）

今般、発見された萱野家蔵の版木と照らしみると、五丁裏の「玉川や名にも」が、埋木でなされているのに、架蔵版本は「にも」は刷りで傍注の「ぞ　イ」という異本校合の部分は朱筆の手書きであり、ほかの仮名たがえなどの校正も、そのことが共通している。すなわち架蔵本は、校正本そのものである。伝本の少ないものの校正本と揃いの版木が出会うということは書誌学的に貴重という他ないであろう。

『捃玉集』の「捃（クン）」は「拾う」「ひろいとる」がもとの意であるから、いわれ無き汚名を雪ぎ、「玉川ノ歌ヲ捃ヒテ記シ侍リヌ」と（『捃玉集』二丁表）という趣旨にもとづく命名であったが、この薄冊な地誌の末尾に正三位公尹、契沖阿闍梨、萩薗家集、参議具集、哲長朝臣と四首並べた後に、「已下数十首近刻」としているところをみると。別冊で「数十首」の「玉川」の和歌を名家から迄うなり、歌集より「捃う」なりして一書に編む企画があったとみえる。

これは、『捃玉集』を上梓した観尊には、既に一つの実績なり経験があった。それは『捃玉集』（嘉永元年）に先立つこと一年、前年度に、紀貫之九百年追善歌集『たち花の香』[2][3]（弘化四年刊）を上梓し、その折に、所載歌数一千三百四首、所載歌人数一千二百人程にも及ぶという歌数と大宮人も含めて貴賤の歌人から「盧橘憶昔」の題詠を集めるという大事業を成し得たばかりであったから、その自信とノウハウは獲得していたのであろう。しかし、今の段階では、それ以上のことを示す資料はみつかっていない。

また、不審なのは、正三位公尹が、『諸家伝』[4]下巻（九四四頁）に載るところの山本公尹とするなら、

「延宝三年月日誕生」で「享保七年七月廿三日正三位、四十八歳」であるから、「杉庵志道ぬしは……（中略）其言をき、てよみて遣しける」とあるのは、おそらく年代的に無理で、『和学者総覧』[5]では「山本公尹（ヤマモトキンタダ）」（七五七頁）に「延享四・九・十三」を没とするので、天保十三年七月十一日没、享年七十六歳の山口志道の学説を耳にすることは不可能で、「山本正三位公尹」では無く、他の人物か、文飾の過ぎた虚構ということになろう。

契沖阿闍梨には故人の師として私淑するところあったらしく、契沖阿闍梨百五十回遠忌追悼歌集『庵のうめ集』[6][7][8]（嘉永三年刊）にも、観尊は次のような和歌を一首献じている。

先うめといひけむ君か庵ふりて
のこること葉も世ににほひつつ

金光院資　教伝房観尊

次にみえる、「萩薗家集」は、夏目甕麿の私家集で『萩園歌集』をさしているとすれば、大変に伝本の少ない写本のことになり、『国書総目録』には慶応大学の一本がしるされているのみである。

「参議具集」は、岩倉具集（イワクラトモアイ）で、嘉永六年五月十六日没、享年七十六才、有名な岩倉具視養父にあたり、権大納言までのぼった。岩倉具集は山陵研究のグループをつくったことで知られているから、あるいは筆者蔵の校正本が山陵研究家であった矢盛[9][10]教愛のところにあったらしいのも、偶然ではなかったかもしれない。

哲長朝臣は、堤哲長（アキナガ）[11]で、文政十年十二月二十二日生、明治二年二月四日没、享年四十三才。堤言長の子で、正三位にまでのぼっている。

真言宗は、もともと、京都の公卿衆との結びつきが強い宗派であるから、都の堂上衆の名と和歌をあげることを良しとしたのであろう。

契沖阿闍梨の和歌は『漫吟集』[12]とあるが、『漫吟集』にも諸本があって、異同が少なくない。ここで、『契沖約全集』[13]第十三巻和歌の巻を引くと、

四

五七九〇番、（三六九頁）
　漫吟集類題巻第二十　雑歌四
の部分で
　高野の僧義剛に、よみておくりける歌
の詞書ではじまる十六首があり、その十四首目に
　玉河やなにそその水くむへくは
　　高野のおくの法こそ有けれ　　五七九〇
とあって、「文化十一年春三月」の奥付のある石津亮澄叙文付の版本をみて、「にも」を「にぞ」と改め、版木には埋木したものらしいが、はじめは「にも」とある写本によったのではないかとも考られ、『契沖全集』には「にも」とする異本のことが記されてはいない。高野山には、かってはより多くの契沖関係の資料が蔵されていた可能性もある。

三、萱野家と『捃玉集』版木

『捃玉集』の版木を蔵してきた萱野家は、九度山の名門、豪商で、かっては高野山の僧坊での消費品の多くの輸送売買にあたっており、高野山周辺の材木輸送と売買も兼ねていた。いわゆる商法でいうと鋸の両引きで、輸送の往復で、往も復も利潤を生むというすばらしさであった。しかし、単なる豪商でなかったという証といえるのが、今般の版木の発見である。

版木の所有は、当時の出版印刷の慣習からいって、出版権の確立であり、版木の売買が出版権の移動そのものであった。ために、版木の所有は出版者の証拠となるわけであるが、『捃玉集』は、その内容からいって観尊がその主体であることは疑う余地がなく、またその版木が観尊の実兄の代々の住家に残されていたということは、おそらく観尊の兄にあたる萱野忠右衛門の経済的支援のもとで、彩色刷の洒落れた地誌の出版が可能になったことを裏付けるものであろう。

版木は摩滅がまったく無く、欠損も見えず。少数部の印刷であったことや、大切にその後も保存されたことの窺える状態で、特に版木は出版権の問題から、出版費用の出資者が、その額にあわせて版木の何枚かを押さえるといった方法がとられたり、当時の出版にあたる書肆が刷り師を抱えているので、版木を預かったりしたが、明治期の急速な印刷技術の変化のなかで転用されたり、失われていったため揃いということはなかなかに珍しい。

藩校版や家塾版でも、版木の揃いの伝存するのが珍しいなかでは、高野山九度山不動院の私家版として、やはり注目に価する一点といえよう。寺院版の一変形ともいえるが、名所図絵の影響を受けた地誌ともいえるし、文人趣味的なにおいもする出版物である。

寺院版ともいえるが、むしろ在俗の豪商萱野家の兄と沙門の弟との手を携えての出版物であり、純粋な私家版といえそうでもある。しかし、伝統的な高野山での経典等に関わる寺院版の影響は見逃せないであろう。

観尊は真言宗僧侶として順調に出世をしていくが、これも兄の経済的支援の賜物で、それを現在みることのできる形として残る一つが『捃玉集』の版木ではないだろうか。

俗人も僧侶も、二つの世界をつなぐものが必要な場合がある。岩倉具集や提哲長につながっていた観尊は、「已下数十首近刻」という目論見をもっていたわけだが、それは京や大坂の雅と俗と人々であったし、貴人や殿人とよばれる公家衆と武士をも含んでいたことは『たち花の香』を構成する歌人たちから容易に推定できる。

兄の萱野忠右衛門は弟の文雅と真言宗派内での活躍を助け、弟の観尊の活躍と交流の拡大は兄の商運をますます拡張させたようである。

山口志道が安房という海路の広けた地域の人ということも深く関わってくるかもしれない。

文雅と経済の活動は、共に盛んなところにしか花開かぬというのが江戸時代であったという証ともなろう。それが出版というメディアを使い、石碑建立と共に事をはこび、高野山を参詣する多くの旅人と遠くて広くの文雅人、教養人に自らの業績を知らしめんとしたところに、当時の高野山の地位の高さもよく知られる。また上方文化圏での京大坂との関わりと高野山を考える上でも注目されよう。

紙数に限りがあるために、本稿に取り上げることができなかったが、萱野家には「高野山玉川之歌　原書　山口志道翁　萱野蔵」と題簽を付し

た、山口志道自筆の「玉川長歌並反歌」（天保十一庚子歳九月　七十六歳杉庵志道（花押）と「天保十一庚子歳八月十五日」に、山口志道の門人の上野志幸と松井志敬が、玉川の水を実際に試飲したことを記したものが保存されている。試飲のいきさつもおもしろく、山口志道の「玉川長歌並反歌」は石碑に刻まれた『捃玉集』に所載のものと少しく異同があるが、これらは別稿に譲ることとしたい。

〈付記〉本論文をまとめるにあたり、版木御所蔵の萱野家の御当主、萱野正巳様、御令兄の村上保孝様、また、御教示、御高配いただきました古西義麿先生、元大阪商大教授の中川光利先生、前九度山町教育長の橋詰弘先生、文化財保存研究グループ代表の坂本一生様には、心より篤く御礼申し上げます。

注

（1）山内潤三「高野山詩歌句碑攷」（『山野有智論集』山内潤三古稀記念出版、平成六年十月二十三日刊、編集発行　山内潤三）一七〇頁、五五天保玉川歌碑の項

（2）管宗次『たち花の香』（一）〈翻刻・解題〉（『国文学研究誌　鳴尾説林』創刊号　一九九三年九月十日刊、武庫川女子大学国文学科西島孜哉研究室内　狂孜会）

（3）管宗次『たち花の香』（二）〈翻刻・解題〉（『国文学研究誌　鳴尾説林』第二号　一九九四年九月十日刊、武庫川女子大学国文学科西島孜哉研究室内　狂孜会）

（4）正宗敦夫編『諸家伝』（昭和四十三年六月十日刊、自治日報社）

（5）国学院大学日本文科研究所編『和学者総覧』（平成二年三月二十日刊、汲古書院）

（6）管宗次『京大坂の文人―幕末・明治』（一九九一年七月十日刊、和泉書院）

（7）管宗次、郡俊明『安政丁巳　浪華尚歯会記と山口睦斎』（昭和六十一年三月二十日刊、和泉書院）

（8）『庵のうめ集』の版本を現在、筆者は二本蔵しているが、その若干に異同がみえる。「観尊」とその和歌に関してはない。

（9）管宗次『京大坂の文人―続―幕末・明治』「国学者　矢盛教愛について」（二〇〇〇年五月十日刊、和泉書院）

（10）矢盛教愛は蔵書に蔵書印「矢盛文庫」の朱印をよく押印するが、架蔵の『捃玉集』には、その朱印はみあたらない。

（11）森繁夫編・中野荘次補訂『名家伝記資料集成』（昭和五十九年二月一日刊、思文閣出版）

（12）『契沖全集』第十三巻・和歌（一九八三年三月四日刊、岩波書店）

（13）契沖は「契冲」、「契沖」の二通りの字を自ら用いていた。岩波書店の全集は「沖」の字を用いているので、ここでも「沖」としたが、『捃玉集』には「冲」とするので、その部分では「契冲」を使用する。

Seido Kanson's Kungyokushu:a History of its Woodcut

Shuji Suga

Department of Japanese Language and Literature, School of Letter, Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan.

Abstract

Seido Kanson was a Buddhist monk of the Shingon sect at the end of the Edo era. Hie edited a book named *Kungyokushu* which was intended to overthrow a common belief that the stream running through the Okunoin of Koyasan was toxic. As the publication of the book cost much, his elder brother Kayano Chuemon gave assistance.

The Kayano family's business was thriving in the Koyasan district, and Chuemon was rich enough to help his brother. Publishing Kanson's book benefited both of the brothers: Kanson was promoted in the world of monks, and Chuemon made a profit on his own business through the sale of the book.

Printing at that time was made by *hangi* or woodcut. It is quite rare to find woodcut preserved by the discendants of publishers. Through the examination of the blocks I conclude that *Kingyokushu* was printed not in order to make money but as a private edition.

七